

日本と中国の諺から見る 人生観・死生観について

黄 欣

0. はじめに

どの民族においても、人々は一生の間に色々な経験をし、そして多くの人々が同じような経験をするのがよくある。そのような経験は人間の歴史の発展とともに、多くの人々に共通する認識として定着し、諺の形式で次から次へと伝えられてきたことが多い。故に、諺は長い間にわたって多くの人々の生活経験の積み重ねから生まれた人生の知恵であると言えよう。諺は人間によって作り出されたものであるため、民族が異なっても諺に共通性を持っているものもある一方、各民族の歴史、地理環境、生産活動が異なるため、その民族の特性、文化の特色も諺に反映している。筆者は日本と中国の諺について、その表現および内容の面から分析し、日本と中国の文化の比較、日本人と中国人の特性の比較を試みているが、本稿では、その一部として、人生と死に関する諺を分析し、日本人と中国人の人生観・死生観の特色を探求していく。

1. 諺と人生観・死生観の関わり

日中両国の諺の共通点に関する先行研究の知見をまとめると、次のようになる。

- ①諺は民衆により作り出され、古くから伝承されてきた経験や知識を伝えるものである。
- ②諺は簡潔で通俗的であり、比較的定型性を有し、口語性が強いものである。
- ③諺の内容はその民族の歴史や風俗、文化と深く関わっているものが多い。

以上のように、日中両国において、諺に関する見解には共通点が多く存在している。諺は、その民族の歴史や風俗、文化と深く関わっているものが多いため、日中両国の諺から両国の人々がそれぞれの人生について、どのように考え

ているか、生と死をどのようにとらえているかという、いわゆる人生観・死生観を窺い知ることができる。

2. 日本人の人生観・死生観

日本には、

浮世は夢
人生は夢のごとし
人生は朝露のごとし
夢幻泡影

という諺がある。これらの諺から日本人の人生に対する考え方や生と死の捉え方を見てとることができる。「浮世は夢」、「人生は夢のごとし」は、この世や人生はすべて夢のようであり、はかないものであることを説いているが、「人生は朝露のごとし」は人生の短さを、「夢幻泡影」は文字通り、「人生は夢であり幻であり、泡であり影である」ということをそれぞれ説いている。また、

会うは別れの始め
生は死の始め
生ある者は死あり
生死不定は浮世の常
生は死の基 逢うは離れるの基
生は寄なり 死は帰なり
朝に紅顔あって 夕は白骨となる
冥途の道には王なし
黄泉路に老若なし
鯨は飛んでも一代 鰻は這っても一代
笑って暮らすも一生 泣いて暮らすも一生

のように生と死について語っているものが数多く存在している。「鯨は飛んでも一代 鰻は這っても一代」、「笑って暮らすも一生 泣いて暮らすも一生」は、身分や境遇に多少の差はあっても、人の一生は結局似たり寄ったりのものだという人生を達観した感慨を述べるものであり、「自分の生活になんとか満たさ

れないものを感じている人々のあきらめと慰めの言葉」¹である。そして、「生は死の始め」、「生ある者は死あり」、「生死不定は浮世の常」、「生は死の基 逢うは離れの基」などの諺は、人の生と死ははかりがたいものであり、人間の力で変えられない宿命であり、生きているものは必ず死ぬということを嘆いているものであるが、「生は寄なり 死は帰なり」は、この世に生きているということは、仮に身を寄せているにすぎず、死ぬことは天地の本源に帰っていくことであることを述べている。これらの諺はいずれもは人生の無常を説いたものである。

無常という観念が日本にもたらされたのは、仏教経典を通じてであった。² 日本浄土教に金字塔を建てた源信(942-1017)の『往生要集』には『涅槃経』から次のような経文が引用されている。

一切のもろもろの世間に、生ける者はみな死に帰す。寿命、無量なりといへども、かならず終尽することあり。され盛んなれば、かならず衰ふることあり。合ひ会へば別離あり。壮年も久しく停まらず、盛んなる色も病に浸さる。命は死の為に吞まれ、法として常ある者あることなし

佐藤(1977)が述べているように、無常はここでは端的に人の死を意味している。すなわち、「人の死を説こうとして、生きとし生ける者の命に限りがあること、盛んならば必ず衰えること、逢い会えば別離があることなどの諸事象が、その傍証として挙げられているのである」³が、やはり「無念の観念の核にあるのは、人の死である。事実、無常という言葉は、しばしば死と同義に用いられる。」⁴

日本の古典文学には無常に対する詠嘆がいくつか見出される。特に『方丈記』冒頭文の

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、ひさしくとどまりたるためしなし

は無常を語ったものとして名高い。この文学に現われている無常観は、上に挙げた諺にも反映されている。

渡辺(1974)によると、仏教は紀元前6世紀末にインドで成立し、インドの国内でも多くの変遷をとげたが、紀元前後に中央アジアに達し、紀元一世紀に

は〈絹の道〉と称せられる旅商の交通路づたいに中国に伝播した。その後中国から朝鮮半島を通り、日本にも伝えられていった。⁵ 仏教は日本に伝来したあと、日本古来の伝統宗教を守ろうとする勢力物部氏と仏教推進勢力蘇我氏との戦いがあり、結局は蘇我氏が勝利した。当時、女帝推古天皇の甥であった聖徳太子は、天皇家に生まれながらも、熱心な仏教信者であり、各地の豪族間の争いを仏教思想を中軸に据えた国家体制で乗り切ろうと考え、摂政として日本の政治の舵取りをしながら、仏教と天皇制を両立させる道を見出した。その後、仏教は日本の公式宗教となった。

日本に伝えられた外来思想として、道教や儒教はいろいろの形で日本人に多くの影響を及ぼしたが、近代西欧文化の民権思想とキリスト教も日本の旧体制を変えるのに影響を与えた。しかし、「外来思想のうちでも、もっとも長期にわたり、もっとも広い範囲に影響を及ぼしたものは仏教であった。」⁶ また現在でも、日本では仏壇を構えている家庭が多い。お葬式は仏式で行うというところに、伝来宗教である仏教が日本人の生活に大きな影響を与え続けていることが窺い知れる。このことは日常生活から生まれた諺にも反映されていることが上に挙げた諺から窺える。日本の諺に人生の短さや無常をはかなむ諺の多いのは、やはり仏教思想の影響であり、真の幸福がこの世ではなくあの世にあるという考えに由来するものと言うことができよう。また、日本には、

つらい娑婆より気晴れの浄土

という諺がある。これは、この世の苦しさを語っている諺であるが、諺に現われた「娑婆」、「浄土」はいずれも仏教用語である。「娑婆」とはサハー (saha) の音写語であり、意味は忍である。つまり、現実の人生は苦難を堪え忍ぶ世界ということであり、娑婆世界と称されたのである。人生はつらくてはかないものであるから、晴れ晴れしていると思われる死後の世界にあこがれるという人生観・死生観が窺える。

人生はつらくてはかないものではあっても、人々はやはり生命に対する本能的な執着を持っており、生命の価値を重んじている。

命は宝の宝

命あつての物種 命あつての芋種

命と綱は長いがよい
死ねば死に損 生くれば生き得
死んで花実が咲くものか
死ぬ者貧乏
死にたる人は生ける鼠に及かず
死しての長者より生きての貧人
死ねば一卷の終わり

などの諺は、このような考えを表明した諺である。人生は長くはない、はかりがたいものであり、生は必ず死によって終止符が打たれ、そこで終わりになるが、「死ぬのは損」、「死んでしまえば何もない」ので、人間はやはり生きているほうが得、という人間が本能的に感ずる素朴な気持ちおよび生命に対する執着が述べられている。

また、

花は桜木 人は武士

という諺がある。これは桜の花と武士の散り際のいさぎよさを語る諺であるが、この諺は価値観を表わすものであると同時に、人生観・死生観をも表わしている。

桜の花について、

桜は、常なる理想世界の現世における具現である。……桜の花は、華やかであるからこそ、つまりその本質において常なる理想世界の一部であるからこそ、逆に現世の有限性を、つまりその無常をもっともあざやかに人びとに思い至らしめるものなのである。人びとは、桜が散ることのなかにこの世の無常が映し出されるのを観た。⁷

桜の花の散ることへの嘆きは、眼前の対象を惜しむのみならず、桜の花に對している処のおのれ自身の有限性への嘆きの色合いを濃く滲ませているのである。⁸

と、佐藤（1977）は述べている。人生も、咲いたと思うとすぐに散っていつてしまう桜の花のようであり、はかないものであるという人々の嘆きがこの諺に

も見られる。

武士道については、『葉隠』に「武士道と云うは、死ぬ事と見付たり」がある。すなわち、武士としてはいつも死の覚悟を持たなければならず、また、このような武士道の死生観を持つことは武士としての必須要素である。故に、「いさぎよく死ぬべし」という死に対する考えは、武士道の核心になっている。一般庶民の死生観の代表とは言えないが、「いさぎよさ」と「あきらめのよさ」を追求する日本人の諦観が窺える。また、日本の歴史において武士道文化が一つの重要な存在であることは言うまでもない。

3. 中国人の人生観・死生観

中国では古くから存在している儒教、道教思想は、伝統を重んじる中国人の考え方や行動を支配してきている。特に儒教は中国思想の主流であり、中国社会に対する絶対的な影響力を維持してきている。儒教における人生観・死生観に関する考えは、孔子の次の言説が最も代表的なものである。

未知生、焉知死（未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん）『論語・先進』

「生のことが分からないのに、どうして死のことが分かるのか」という意味であるが、この言葉から「死というような人間が定かに知ることのできないもの、人間の力でどうすることもできないもの、に心を悩ますより、この世の生の問題の解決に全力を注ごうとする姿勢がそこに見られる。さらに……生の意義を知る者のみが死の問題について正しい認識をもち、すぐれた身の処し方ができる」⁹とする思想である。すなわち、死の意義は生のなかにしかなく、生の価値を知ってはじめて死の意義が分かる、ということである。孔子の生死の問題についての基本的な考えはその弟子たちにも受け継がれた。例えば、

死生有命、富貴在天（死生は命有り、富貴天に在り）『顔淵』

という子夏の言説がそれであり、中国人の運命観を語っている。運命観は中国人の思考習慣に多大な影響を与えた儒教の伝統的な認識でもあると言うことができよう。運命観といえば、中国には「天」や「運命」、「福禍」に関する諺が数多く存在している。例えば、

各人头上一个天（一人一人の頭上にそれぞれ一つの天）

三分人事 七分天（三分の能力、七分の運）

听天由命（天に運命を任せる）

明天自有命安排（明日はどうなるかは運命による）

为事在人 成事在天（物事は人が為すものであり、しかしそれが成功するかどうかは天によって決定されるものだ）

天有不测风云 人有旦夕祸福（天には風雨の憂いあり、人には不時の災難あり）

天下没有不散的宴席（天下にはいつまでも続く宴席はない）

人无千日好 花无百日红（人に千日の盛りなく、花は百日の赤さなし）

好花不常开 好景不常在（きれいな花はいつでも咲いているわけではない、いい景色はいつまでもあるわけではない）

月圆易缺 花好易残（月円ければ欠け易く、花好ければ残り少なし）

十年风水轮流转（十年は風水のごとく流転し変わる）

穷不过三代 富不过三代（貧乏もせいぜい三代、金持ちもせいぜい三代）

福无双至 祸不单行（福は二つして至ることなく、禍は一つで来ることはない）

祸兮福所倚 福兮祸所伏（禍には福がよりかかっており、福には禍が隠れている）

塞翁失马 焉知非福（塞翁馬を失う、安んぞ福に非るを知らん）

などがそれである。すなわち、一人の人間がいつも幸運に恵まれることはあり得ないし、幸運がすべての人に同時に巡ってくることもあり得ない。そして、この世では幸福な時は束の間に消えてしまうがゆえに、常に尊いと、人々は思っている。また、これらの諺は、すべてのものは栄枯盛衰を免れず、盛んになったものは必ず衰える、という「盛者必衰」の「理」を語っている。勿論これらの中には、古くから伝わってきた封建的な教えや迷信の含まれていることは言うまでもないが、これらの諺には、中国人の「天」に対する認識が如実に反映されている。この「天」に対する認識については、黄（2001）『日本人と中国人の世間観』でも論及したが、ここでもう少し詳しく分析してみる。

ここに現われる「天」は、人の運命の主宰者としての「天」である。太古より今日にいたるまで、漢語の日常的な使用において、「天」は宿命や主宰、それ

から自然という二重の意味あいをもち続けてきている。古代においては、中国の文明の発祥地である黄河流域は黄土ばかりの荒蕪たる平原であり、その風土は戦乱や大洪水、旱魃、虫害の被害が恐ろしく、人間にとって救いを賜るのは頭上高く万物を覆っている「天」である。『詩経』の中で、天に関する語彙、表現が実に豊富であることも、それを裏付けている。例えば、「上天」、「蒼天」、「皇天」、「昊天」などがそれである。中国の古代の人々には、天は万物の主宰者であり、人の運命の主宰者であると信じられていた。すなわち、「天を絶対者とし、天が人間を生み（天烝民を生ず）、下界を君臨し、人間の吉凶禍福をつかさどり、天下の治乱・興亡を与えるものであり、王朝の交代、飢饉、災害、天変地異、人間の生死と運命及び人の才不才にいたるまで、すべてを天が賦与するものと考えてきた。」¹⁰ これはいわゆる「天命思想」あるいは「天命観」と言われ、古くから経書により伝承されてきた言葉である。例えば、孔子は「不怨天、不怨人、下学而上達者、知我者其天乎」と説き、『論語』にも「五十而知天命」という言説が見えるが、中国人は天は自分たちの運命の主宰者であることを信じており、そして禍福は天の定めたものであると信じている。「天命」とは、神秘的な存在として信じられるようになった「天」が、万物を主宰するために万物に命じた絶対的な命令としての「命」である。中国人は天命を尊んできたのである。天を畏敬するがゆえに、天より与えられたと思われる運命を素直に受け止め、禍であろうと、福であろうと、すべて天の意志であると信じている。このような、世の中の出来事と自然世界に発生した災難や禍福とを因果関係で結び付ける考え方は、儒家の「天人合一」の考え方でもある。

次の諺もこの思想を表明したものである。

苍天不負有心人（天は意志のある人にそむかぬ）

天无绝人之路（天には人を絶する路がない）

「苍天不負有心人」は「あきらめずに粘り強く努力すれば、いい結果が得られる」ということを「蒼天」に託しているのに対し、「天无绝人之路」は「努力する人には天は必ず道を開いてくれる」と説いている。

前述したように、日本人の諦観は「いさぎよさ」と「あきらめのよさ」によって示されるが、これに対して中国人の諦観は「天命観」によって示されると言うことができよう。上に挙げた

为事在人 成事在天

は、中国人の天命観を表わすものである。しかし、物事が成功しない場合、中国人は表面上はあきらめるようであるが、実際には物事が成功するまで粘り強く待ち、そして努力していくのである。

魯迅は『且介亭雜文』の中で、「運命」という短文をものしているが、その要旨は次のようである。

中国人は確かに運命というものを信じるが、同時にまた運命は移し動かすことができることも信じている。中国人にとって、運命とは将来への道筋を示すものではなく、今日までの姿、結果に対して、これも仕方がなかったのだという一種の諦めとして運命をもち出すのである。したがって中国人の言う『没法子』とは過ぎし方への諦めと同時に次への転換の前言葉と見るべきである。

このような運命に対する中国人の考えは「苍天不負有心人」とか「天无绝人之路」という諺にも反映されている。

そのほか、中国には

豹死留皮 人死留名（豹は死して皮を留め、人は死して名を残す）
 人生一世 名垂千古（人は一世、名声を後世に残すべき）
 留得青山在 不怕没柴烧（青山がありさえすれば、燃やす柴がなくなる心配などいらない）
 车到山前必有路 船到桥头自然直（車は山に近づけば必ず路が現われ、船は橋脚に近づけば必ずとまらずに進む）
 好死不如恶活（惨めな生きざまであっても、いさぎよい死にまさる）

のような諺もある。これは、生命の価値に対する認識や生への執着を表わすものであるが、「留得青山在 不怕没柴烧」、「车到山前必有路 船到桥头自然直」は、中国人の世間観を表わすものであると同時に、人生に対する認識をも表わすものでもある。これらは単に本能的な感覚を述べたものではなく、生への期待を意識し、主体的に生を追求することを表明したのものである。言い換えれば、生命、人生に対する肯定と執着を表わしたものである。中国人は、生がどんなに辛くても生き続けられるまで精一杯生きぬき、死が来れば仕方がないと

考えるが、自分から進んで死のうとはしない。そして、たとえ死ぬとしても、惨めに死ぬのではなく後世に名を残すような死に方をすることがすばらしいと考えている。

また、

知足者常乐（足るを知る者は常に楽あり）

知足常足 终身不辱（足るを知れば、辱しめられず）

などのようなものも存在している。これらの諺には中国人の特性としてしばしば指摘される「楽天性」と「知足思想」の考えが見られ、中国人の人生観が窺える。¹¹

儒教は中国人の考え方や行動に絶対的な影響を及ぼしてきたが、仏教思想が中国人の生活にも大きな影響を与えたことは否定できない。林語堂が述べているように、「仏教は中国に輸入された中国人の思想の一部となった唯一の外来思想」¹²であり、中国人の生活に幅広く影響を与えている。その影響は諺にも現われている。例えば、

人生如白驹过隙（人生は白い駒が隙間を通るように速いものだ）

人生一盘棋（人生は将棋をさすごとき変幻無常なものだ）

人死如灯灭（人の死は灯の消えるが如し）

有生者必有死者（生ある者は必ず死す）

黄泉路上没老少（黄泉路に老若なし）

などはそれである。「人生如白驹过隙」は、歳月の流れの速さや人生の短さを感じ嘆くものであり、「人生一盘棋」、「人死如灯灭」、「有生者必有死者」は、人生は変幻無常であり、はからぬものであることを説いたものである。

4. おわりに

儒教は日本に伝えられた後、日本にも大きな影響を及ぼしたものであることは言うまでもないが、儒教は中国の社会を基盤として成立した思想であり、中国人固有の生活様式や生活意識を反映している側面があるため、これを完全に理解し受容することは困難である。それゆえに、儒教の日本における受容は制約され、影響力には限界があったのである。とはいっても、儒教が日本人の生

活に影響を与えていることは事実である。しかし、民衆たちに共通する認識として定着し人々の生活経験を表わす諺の中で、多くの諺に仏教の「無常観」が見られ、反面、儒教思想の「運命観」、「天命観」が表れる諺は極めて少ない。これは、日本人の生活意識に対する儒教の影響が、同じ外来宗教である仏教ほど強くなかったことと深く関わっている。「3. 中国人の人生観・死生観」に挙げた「各人头上一个天」、「听天由命」、「天有不测风云人有旦夕祸福」、「为事在人 成事在天」などの中国の諺が日本においては極めて少ないということも、その裏付けであると言えよう。

注

- 1 奥津文夫 (1978) p.139.
- 2 佐藤正英 (1977) p.120.
- 3 佐藤 (1977) p.120.
- 4 佐藤 (1977) p.121.
- 5 渡辺照宏 (1974) p.69.
- 6 渡辺 (1974) p.8.
- 7 佐藤 (1977) p.125.
- 8 佐藤 (1977) pp.125 - 126.
- 9 源了圓 (1977) pp.209 - 210.
- 10 清水徳蔵 (1984) p.24.
- 11 「楽天性」と「知足思想」については、黄 (2001)『日本人と中国人の世間観』で論及した。
- 12 林語堂 (1992) p.132.

引用文献 (引用順)

- 奥津文夫 (1978)『英語のことわざ——日本語の諺との比較』サイマル出版社
 佐藤正英 (1977)『無常の文学』『日本における生と死の思想』田村芳朗 源了圓編
 有斐閣 120 - 136 頁
 渡辺照宏 (1974)『日本の仏教』岩波書店
 源了圓 (1977)『近世儒者の死生観と靈魂観』『日本における生と死の思想』
 田村芳朗 源了圓編 有斐閣 208 - 224 頁
 清水徳蔵 (1984)『中国的思考と行動様式』春秋社
 黄欣 (2001)「日本人と中国人の世間観——諺に見られる言語表現からの検証と考察」
 『多元文化』創刊号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 53 - 65 頁
 林語堂 (1992)『我が中国論抄』鋤柄治郎訳 黄河